

2006 ワールドカップドイツ大会のゲーム分析
～ボール奪取からゴールまでの過程について～
Analysis of the game 2006 FIFA World cup Germany
～About the process from take a ball to the goal～

1K03B034・3 氏名 大平 潤

指導教員 主査 堀野博幸 先生 副査 石井昌幸 先生

I. 緒言

今年行われた 2006 ワールドカップドイツ大会は、出場チーム数が 32、試合数が 64 の現行制度となった 1998 ワールドカップフランス大会以降でゴール総数が最も少ない大会であり、各大会におけるゴール総数は減少傾向にある。その要因として考えられるのは、守備戦術の向上である。では、守備側ゴール前で組織される守備戦術を崩して得点するためには何が必要であるか。本研究では、オープンプレーの中でも特にボールを奪取してからゴールに至るまでの攻撃の過程を見ることで明らかになると考える。

ボールを奪取した瞬間に攻守が入れ替わり、ボールを失ったチームはこの時点ではまだ守備体勢を整いきれず、その間にボールを奪取したチームがどのようにボールをゴールまで運び得点しているか。この観点から、2006 ワールドカップドイツ大会のゴールについて分析することによって、守備側ゴール前で組織される守備戦術を崩して得点するために有効なデータを見つけ出したい。

II. 方法

1. 研究対象

2006 ワールドカップドイツ大会の全 64 試合で生まれた 147 ゴール中、ボール奪取からゴールまで至った 72 ゴールを対象とする。セットプレーからの得点、オープンプレーの得点の中でも攻撃の開始がボール奪取ではない得点は除いた。

2. 分析手順

日本国内で TV 放送された 2006 ワールドカップドイツ大会の VTR を利用し、ボール奪取からゴールまでの過程の各項目について集計した。

3. 分析項目

ボール奪取からゴールまでの過程に関わる要素として、10 項目を設定した。

III. 結果

ボールを奪取した選手の体の向きがボールを奪取した時点で前を向いている時に、多くのゴールが生まれていた。また、そこから始まる攻撃が GO の場合のゴール数よりも、

STAY の場合のゴール数のほうが多かった。このことから、ボールを奪取したプレーヤーのボール奪取後のプレーの選択がゴールに向かう意識を持っていない場合でも、十分ゴールすることが可能であると考えられる。

ボール奪取地域とゴール数については、大きな関係性は見られなかった。

ゴールにつながるボール奪取では、ボール奪取後 1 本目のパスが前方向に出されることがほとんどだったので、ボールを奪取した選手が前にプレーすることが可能な状況の時に、ゴールにつながる攻撃がしやすくなっているのではないかと考えられる。

IV. 考察

中盤より前、もしくは自陣近くであっても攻撃に移れる状況で前を向いて GO となれる状態でボールを奪取している場合に、少ないパス数、ドリブル数で時間をかけずに攻撃するパターンと、自陣ゴール近くで前を向いて STAY となる状態でボールを奪取した場合に、パスをつなぎ、ドリブルやキープなどで攻撃に緩急をつけ、時間をかけながらも相手の守備組織を崩す工夫をして攻撃するという 2 つのパターンが多くゴールを生み出していたということが、2006 ワールドカップドイツ大会のゴールの分析から見えてきたことである。

また、ボール奪取後 1 人目と 2 人目のつながりについてもこの 2 パターンに当てはまるものであり、ボール奪取後 1 本目のパスのほとんどが前方向であったことから、この 2 パターンのどちらであっても前への意識がある場合にゴールにつながっていることが考えられる。

今までにあった多くの研究では、その研究のテーマに沿った各項目についてまとめ、その大会の全体のおおまかな傾向を知るにとどまっていた。しかし、本研究では、どういった状況からゴールが多く生まれているか、その時にどの要素がどのように関わっているかを細かく見ることで、全体のデータからだけでは見えてこない部分にまで着目し、現代のサッカーにおいて、守備側ゴール前で組織される守備戦術に対してどのようにすればゴールできるかについての有益なデータを得られたはずである。